バカップル無人島サバイバル！

――え？これって本当に無人島ですか？

「アルディ、あなた二月十七日で芳樹くんと付き合って十年になるって言ってたわよね」
「うん！　だから、その日は二人ともお休み取ってお祝いするんだー」
「じゃあ、その次の土日、空けておきなさい。わたしからもプレゼントをしてあげる」
「ナーシャ姉のプレゼント？　嬉しいけど怖いなぁ。とんでもないものじゃないよね？」
「ちょっとした旅行だから安心しなさい」
「へぇ～。それなら大丈夫かな。どこ行くの？」
「当日までナイショ。芳樹くんにも伝えておいてね」
「はーい！　ありがとう！　ナーシャ姉！」
そして、その『ちょっとした』旅行の基準が人それぞれ異なるという事を後に実感する事になるアルディだった。

アルディと芳樹を迎えにきたのは、いつものナスティアのリムジンだった。そこから移動する事しばらく。着いたのは……
「空港？」
「これからプライベートジェットで移動よ」
「プライベートジェット？」
まさかの単語に驚くアルディと芳樹。
「あ、というよりパスポート持ってきてないけど、国内なんだよね？」
「国内といえば国内、国外といえば国外。私有地だからパスポートは要らないわ」
「し、私有地？」
「そう。これから向かうのはプライベートアイランドという名の無人島よ！」
「「無人島？」」

「一泊二日のサバイバル生活楽しんでね」
「ナーシャ姉〜？！」
「楽しめるか！！」
そうこうしている内に飛行機は着陸し、無情にもアルディと芳樹だけを置いて帰って行った。
「マジか……」
「どーしようね……」
二人が途方に暮れていたその時。
「アルディ様と芳樹様ですね」
「？！」
「お待ちしておりました」
背後から高そうなスーツを着こなす紳士に声をかけられた。
「あれ……？　ここって無人島じゃ？」
「はい。ここは無人島です。ナスティア・ラフォレーゼ様がご購入後、電気水ガスなどのライフラインを引き電波も入るようになっておりますが」
「あ、ホントだ。スマホが圏外じゃない」
「他にも害獣は駆除し安全を整え、居住する屋敷に、アクティビティスポットとしてプールや温泉、様々なスポーツのコートや、シアタールームなど、どこにも引けを取らないレジャー施設が建設されております。また、お世話係をはじめ、各種スタッフもおりますので何かございましたらなんなりとお申し付け下さい。和洋中の一流専属シェフなどもおりますので、山岳部や川や海に狩りや釣りに出られた際は獲物を調理する事も可能ですので、ぜひお楽しみ下さいませ」
「……なんか、思ってた無人島と全然違うな」
「うん……無人島というより貸切レジャーアイランドって感じ。ナーシャ姉いつの間にこんな島買ってたんだ

ろ。流石だなぁ……」
「ちなみにこの島の名義人は共同名義としてアルディ様と芳樹様になっております」
「「は?!」」

【続きは本編で】

【奥付】

タイトル・バカップル無人島サバイバル！――え？これって本当に無人島ですか？　サンプル
著者・咲良椿姫
サークル・Whimsically.
シリーズ・箱庭世界のヒトカケラ。
発行日・二〇二二年二月二十日　〇二二〇#エアブー二〇二二
印刷所・プリントオン様
メールアドレス・cielo6918@yahoo.co.jp
Twitter・@Nstda_Vitte
HP・Whimsically.
https://whim.jp.net/
本書の無断転載・複製、オークション・フリマサイトなどでの転売は固く禁止致します。